

## 二〇一二年度立教大学史学会大会シンポジウムコメント

小野沢 あかね

二〇一二年度の立教大学史学会大会では、後藤雅知先生の着任に合わせて、シンポジウム「近世・近代の地域社会」が企画され、三人の方々に報告（後藤雅知「林産物の生産

と輸送―近世房総の養老川水運を例に―」、小松賢司「藩領村役人にとつての城下町―近世後期の武蔵国川越を事例に―」、大川啓「明治期の都市火災と地域社会―地方都市秋田を事例として―」していただいた。当日の聴衆の一人として、ここでは三報告の内容のうち、最も印象に残った点についてそれぞれ指摘し、そのうえで、「近世・近代の地域社会」研究の方法・視座として学んだ点を述べさせていたがたい。

まず、後藤・小松報告は、いずれも一次史料をふんだんに使用しており、日本近世史における地域社会研究の実

証水準の高さを十分にあらわしたものだ。それぞれの視角から地域社会の様相がまざまざと浮かび上がったように思う。

後藤報告では、林産物（真木や炭）の生産と流通の実態を通じた地域社会（岩槻藩房総藩領）の構造的把握が目指され、活字化されていない永島家文書を使用した詳細な実証がなされた。報告では、林産物の生産・流通過程における藩・林守・船持仲間・江戸商人の関係性が描かれた。とくに「おわりに」の部分で、船持仲間による輸送の差配と独占的輸送が指摘され、林守も船持仲間依存していたこと、ひいては江戸商人による林産物の生産・流通の規定性の強さが強調された点がいへん興味深かった。大会当日は、そうした地域の林産物生産・流通過程における江戸

商人の支配力とその背景について、また江戸商人の資金力について質問が出された。これに対し、林産物の流通を江戸商人が把握しやすい地理的条件だったこと、一方で、百姓も商人に対抗して真木ではなく炭の生産・販売へ移行していくことなどを報告者が指摘したが、地域社会における江戸商人の支配力の強さ、年貢真木の減少、百姓のしたたかさなどは、近年の近世地域社会論にどのように接合するのか興味を引かれた。

次いで、小松報告では、一九世紀半ばの城下町川越における、赤尾村役人林半三郎信海の、年貢米などをめぐる藩役人との具体的なやり取りが、豊富な日記史料を用いて実証された。同報告で最も印象に残った点は、藩役人に対する村役人の交渉には、藩役人の自宅（役宅）における下交渉と、役所における本交渉とがあるということと、下交渉があるからこそ役所での本交渉がスムーズに行くということである。しかも、林信海は川越商人から購入した鯉節や酒を携えて下交渉に臨むこと、それらの費用は村入用から出ているということであり、そのしたたかな交渉の経緯からは、村役人側、ひいては村側の主体性が読み取れて興味深かった。また、本報告が指摘した、藩役人―村役人関係を支える存在としての、ひいては交渉の武器として村役人が進物の購入をしたり酒食を提供したりする場としての川

越商人像は、近代以降どのように変化していくのか興味を覚えた。全体に、日記という史料の性格上、示された歴史像がたいへんリアルであったように思う。

次いで大川報告は、一八八〇～九〇年代の秋田市における火災にともなう地域社会の生活危機の際、危機を一定程度緩和するような富裕層による慈善的行為が存在したことに着目し、慈善的行為を促した人々の論理に迫ろうとした。いまだ近世的な価値観も残存しているなか、民衆はどのような論理で被災者に富裕者が慈善を施すべきであるとの主張を繰り広げたのかは、民衆思想史研究の重要なテーマである。また、史料制約が大きいなか、同報告は新聞史料の記述のされ方を読み込んだ意欲的な報告だった。同報告ではまず、江戸時代に貧民救済の事業を藩主に託されていた那波家が、地元の人々に「慈善救済の旧家」と目されて打ち壊しなどの対象にならなかった反面、そうした評価ゆえに、同家は一八八六年の火災に際して寄付や救助を行なわないわけにはいかなかったという意味で制約も受けていたことが述べられた。一方、新興の商人であった辻家は、火元が同家であるなどの風評を流されたり、那波家と比べられて財力はあっても徳望の足りない一家であると評されたりした。このように、火災に伴う危機の際、新聞は当然富裕者が慈善を施すべきとの論調であったが、積

善の家」と評価される商人とそうでない商人とが存在していた。同報告からは、「積善の家」と評価される「家」とそうでない「家」との違いは何なのか、江戸時代において慈善の担い手だったかそうではなく近代の新興商人かによって評価が分かれるのか、興味を抱いた。そして、いずれにしても富裕者は慈善を施すべきであるとの民衆意識は、その後どのように資本主義的な意識に塗り替えられてしまいか興味を覚えるとともに、貧困を個人の自己責任の結果として語る風潮が強い今日だからこそ、あらためて検討してゆくべき重要なテーマであるとの感想を抱いた。

以上、みてきたように、三報告ではそれぞれ、地域社会の主要な構成員（藩役人、村役人、商人、生産者など）に目をくばり、それらの相互の関係を論じたものだった。そしてそれらの関係性が、それぞれの報告の対象時期・対象地域によって異なってくる点が私にとっては勉強になった。さらにそのなかで印象的だったのは、藩権力や行政権力の支配力の強さというよりは、商人の役割や、村役人の交渉力や主体性、ひいては生産者や民衆のしたたかさに丁寧な目配りがされている点であった。こうした地域社会の捉えかたに私も共感を覚え、自分自身の研究においても、そして立教大学の教育においてもあらためて重視していきたいスタンスであると考えた次第である。